九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

デュ・バルタスを窘めるクリストフル・ド・ガモン：サラマンダー，不死鳥，ペリカン

高橋，薫
中央大学法学部 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1430750

出版情報：Stella. 32, pp.153-164, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

デュ・バルタスを窘めるクリストフル・ド・ガモン*)

――サラマンダー，不死鳥，ペリカン――

高　橋　　薫

デュ・バルタスといえば，まずその『聖週間もしくは天地創造』（以下『聖週間』と略す）が自ずと連想されるであろう。聖書の「創世記」に題材をとったこの作品は発表されるやいなや大変な評判をとった。それは初版から時をへず，デュ・バルタスと同じ改革派信徒であるシモン・グーラールのみならず，カトリック教徒の学者パンタレオン・テヴナンの手により註解書が上梓されたことからも分かるだろう[1)]。しかもナントの勅令のはるか前にである。フランス語圏の作者によって執筆されたものではないにもかかわらず，その影響は大きく，フランス国内においても国外においても少なからぬ文筆家が天地創造詩に手を染めた。そのひとりが，『聖週間』とまったく同じタイトルで 8,600 行ばかりのアレクサンドラン詩篇を遺したクリストフル・ド・ガモンである[2)]（ガモンの『聖週間もしくは天地創造』を『聖週間』と区別するために，こちらを『天地創造』と呼ぶことにしよう）。以下，顧みられることの少ないガモンの『天地創造』の紹介を兼ねて，なぜ同じ改革派に属するガモンが『聖週間』に異を立てて同名の作品を世に問うたのかを考察したい。

1

クリストフル・ド・ガモンは改革派を父にもち，1574 年のおそらく 9 月，アノネで生まれたらしい[3)]。1589 年にモンペリエで寄宿生となり，翌年にはニームで薬剤師をいとなむ改革派の屋敷に預けられたと伝えられる。おそらくガモンも薬剤師となるべく期待されていたようで，その著書からは彼が医学，薬学，自然科学，錬金学の素養を身に着けていたのがうかがい知れる。そして 1597 年，23 歳で父を亡くした。既に富裕な未亡人と結婚していたうえ，父は少なか

らぬ資産を遺しており，さらに健康に不安を抱えていたためもあって，このころから詩作に志していたらしい。その後，ガモンについて知られていることはそう多くはない。1604 年に父方の相続をめぐって兄に対して訴訟をおこしたこと，1607 年，ラ・ロシェルで開かれたカルヴァン派の宗教会議に地方を代表して参加したこと，1616 年に弁済不能者として宣告を受けたこと，1621 年，ヴィヴァレの屋敷がカトリック教徒によって略奪されたのを見たあとで，47 歳にして歿したことのみが知られている。

『ラ・フランス・プロテスタント』改訂版第 6 巻は伝記的事績とともに，ガモンの詩作についても一定の紙幅を割いている[4)]。そこには，ガモンの動機が「天地創造という，神のみ業である荘厳な営為を描くにあたって，デュ・バルタスはどんな些細な不正確さも蔑ろにすべきではなかった」というものであったと記されている。ガモンの詩句を振り返れば，総じて評価が悪いとはいえ，後述するようにデュ・バルタスとマレルブを結ぶ架け橋と見なされるだけあって熱意と色彩を失わない幾つかの詩句がないわけではない。「第 V 日」の冒頭の詩句はその一例と言えるかも知れない――

学識ある天地を回転させる方が蒼穹を球にして
その方の右手が輝く炎を天球に撒くとき，
宇宙が誕生する過程で，その堅固な基底を有するようになったとき，
その方は多くの葉と茂る種族を生み出させる。
同じくアンフィトリテ〔ポセイドンの妻で海の女神〕と大気とを持ち場に落ち着け，
この方はこの日海と大気をさまざまな主（あるじ）で満たそうと欲せられる。
さまざまな，とはいえそれらはそれぞれに特定の年齢をもち
魚はその鰓を，鳥は羽毛を，
一方は清澄な空中を切り裂き，他方は透明な水面を切り裂く。
一方は走り他方は素早く進む。そのどれもが卵から生まれる。
しかし，おお，神よ，なんという誤解か，おお，真なる神よ，なんというおとぎ話か，
欺瞞的に愛想の良い多数の著作のなかに，
さまざまに異なる海の子供たちの群が，
そして大気の野原をはばたく住人たちが，
わがミューズは，まだ幼いながら，たしかに気づいていたのだ，
影に覆われたそれらの路を辿ってみると，騙されたことを。
しかしいっそう燃え盛る光線で照らし出す，もっと成熟したその眼は，
よりしっかりした局面のもと，真理を見ようとしている。
鷲は仔鷲のころ雲を使って騎行しながら，

時折眼を木陰に向ける。
しかし年端をかさね，眼差しがしっかりしたものになると，
光り輝く太陽をしっかり見つめるようになる。
それと同じように，私の精神は時として明りの方に向き，
あらゆるとはいわずとも，少なくとも一日のうちに知りうる栄光を数える。
ペテン師の著作よりも真実がどれほど優れているだろうか，
そしてどれほど一介のガモンは純白を探し求めていることか。[5)]

以上の引用で「詩人」ガモンの評価が決定的になるかどうか，それを私たちはこれから考察していく。繰り返しになるが，たとえヴィヴァレの地方史家アルバン・マゾンの賞讃があるとはいえ，その全般的評価はおよそ高くなかった。しかし「高くなかった」の一言で切り捨てる前に，碩学クロード＝ジルベール・デュボワの見解を尋ねずに済ますわけにはいかないだろう――

デュ・バルタスからガモンへ，断絶は存在しない。もしガモンの『天地創造』がガモンの〔単純に「デュ・バルタスの」の誤記であろう〕それに「抗して」作成されているとしても，それはより遠くまで行くために『聖週間』に依拠する目的でである。とはいえ連続性はヴァリエーションと，歴史が進む方向，諸理念が発展する方向への転向を排斥しない。ガモンにおいて引き立てられるのは，その時代の政治や，神学や芸術が方向を変える，より展開された統一的な方向である。この作品において合理性によって採択された重要性と，理性の自由な実現，ポスト＝カルヴィニスムの聖書解釈を享受する聖書読解にまで推し進められた要求，形態を変え明晰さと簡潔性と公式の場を飾るにふさわしいマレルブ的な方向に赴く修辞学が看取される。[6)]

「合理性」「ポスト・カルヴィニスム」「マレルブ的な方向」――いかにも大きな図式でフランス 16 世紀末から 17 世紀初頭に至る文学事象を切り取ってきた，デュボワらしい解読である。だがこれは本当なのか。時代にもう少し寄り添いたい私たちは，ガモンの『天地創造』を仔細に検討してみたいと思う。

2

「第 I 日」の天地創造に先立つカオスの有りようから，「第 III 日」の田園生活の謳歌を経て「第 VI 日」に見られる人体論論争まで，ガモンは頻繁にデュ・バルタスの名に言及している。それはあたかも時代を超えて論争を挑むがごとくで，さらに暗黙の了解が成立しているかのように，デュ・バルタスの名を出

さずに呼びかける場合もある。ここでは奇獣の伝説をめぐってデュ・バルタスに対しガモンがどのように異論を投げかけたか，シモン・グーラールとパンタレオン・テヴナンの註釈を借りながら見てゆくことにしよう。

ガモンは主にふたつの文脈からデュ・バルタスに対する批判を展開する。ひとつは当時の自然学理論にかなった見解を述べるケース。もうひとつは倫理的な自分の見解を確認し披瀝するケースで，後者については『聖週間』「第 III 日」の 102 行目に向けられた批判がその代表例である。この場合ガモンは，ピブラックを代表とする宮廷詩人が好んで取り上げた田園生活や隠遁生活の魅力とは異なる視点からデュ・バルタスを批判する。我々としては前者に注目し，特に 3 種の奇獣についての異論を紹介したい。俎上にのせるのは，不死鳥伝説，サラマンダー伝説，そしてペリカン伝説である。

まずは《**不死鳥伝説**》について。『聖週間』では，不死鳥は次のように描写されている――

ほとんど同時にこの灰の塵から
一匹の虫が，続いて卵が，ついで鳥が生まれ出る，
しかしながらこれは同じ鳥であって，その種族から生まれ，
200 年の新しい輝きをもってまた死に始め，
炎の直中からその美しい取戻し，
その最期にあっては無限でありながら，墓へと向かってゆく。[Bartas I, V 551]

この不死鳥伝説にかんし，まずグーラールの註釈を紹介しよう。グーラールはこう註をつけている――

不死鳥→] ブロンはその「鳥類誌」第 5 巻の最終章で延々とこの鳥について述べている。オウィディウスの巻 15 を見よ。わたしたちの詩人はプリニウスが第 10 巻 2 章で語っていることを喜んで描写し，色彩を与えている。「アラビアにはすべての他の鳥に勝って有名な鳥（これは多分架空話と思うが）不死鳥がいるが，全世界にたった一羽しかいないのでまず見られないという。その話とはこうである。〔…〕この不死鳥についての最初にしてかつもっともくわしいローマ語の記事は，教師につくことなしにきわめて高くかつ多様な学問を身につけたことによって有名な，卓越した元老院議員マニリウスによって与えられた。彼は次のように述べた。誰もこの鳥が餌を食べているのを見たことがない。アラビアではそれは太陽神に捧げられている。その寿命は 540 年である。それが歳をとりかかるとアシア桂皮と乳香の小枝で巣をつくり，それに香料を詰め，死ぬまでそこに横たわっている。それの骨と髄からまず一種のウジが生ま

れ，それが成長して雛鳥になる。そしてまずもって前の鳥にしかるべき葬儀を行ない，それから巣全体をパンカイアの近くにある『太陽の市』へと運びおろし，それをそこにある祭壇の上におくと，等々」(中野定雄訳)。[Indice, 318-319]

つづいてテヴナンは，グーラールの註釈を以下のように深化させている――

それはその眼を輝かせる→] 不死鳥。プリニウス第10巻2章と同じくオウィディウス『変身物語』巻15から採られている。ブロンの「鳥類誌」第6巻最終章を見よ。プリニウスはしたがって上記の箇所でつぎのように援用されている。「〔…〕オウィディウスの『変身物語』第15巻では〈ひとつだけ自分で生まれかわり，自分で自分を再生するものがある。アッシュリア人たちが「不死鳥(フェニックス)」と呼ぶ鳥だがこれは穀物や草によってでなく，乳香の木の樹脂とバルサム樹の樹液で生きている。この鳥は，500年にわたるその生涯を生き終えたと知ると，樫の枝か，うちそよぐ棕櫚の梢に場所を選んで，鉤爪と穢れない嘴とで自分の巣をつくる。そこへ，桂皮と，しなやかな甘松の穂，砕いた肉桂と，黄色い没薬とを敷きつめるとその上に身を横たえる。こうして香りにつつまれたまま，命を終える。すると，この父親のからだから，あらたに，小さな『不死鳥』が生まれ出るというのだ。そして，この新しい鳥も，親と同じだけの年月を生きることになるのだという。この雛鳥が成長して，力をつけ，ものを運ぶことができるようになると，高い木の枝から重い巣を取りはずし，自分の揺籠でもあり，父親の墓でもあるこの巣を運んでゆく。それが，子としての努めなのだ。虚空を飛んで，はるかエジプトの「太陽の都(ヘリオポリス)」にたどりつくと，太陽神の神殿の扉の前にそれを置く〉」(中村善也訳，岩波文庫，318-319頁)。[Bartas, III 484]

そしてガモンはこれらの詩句と註釈をへた後で次のようにバルタスに説く――

《バルタスよ，さまざまに成り立っている天空のもと，10の冬を100回も周回する
天の運行が滑らかに動くことを見るどころか，
ケレモン[7]がありそうにないまま述べて以来，お前のあまりに信じやすい
心にこうした信念を植え付けてしまったのだが，
よりまっとうな人々は誰もが，その年齢を明らかにし，
彼らのたくさんの長大な著作のなかで，はるかに短くしたのだ》[Gamon, V 154]

次いで《**サラマンダー伝説**》。『聖週間』におけるサラマンダーの描写は以下の如くである――

神はそれぞれの種に種族を生み出す能力を
吹き込んだことでは満足されず，その叡智によって

いかなるウェヌスの助けも借りず，生命のない物質から
数多くの完璧な動物を，この地上で形成されるようにされた。
かくして冷たい気質はサラマンダーを生み出し，
この動物は己の気質にじっさい類似しており，
百もの冬で膨れ上がって，赤く波打つ
炎に触れるだけでただちに弱める。[Bartas I, VI 360]

これに付されたグーラールの註釈は次のとおり――

サラマンダー→] プリニウス，第 10 巻 67 章。「サラマンダーは身体すべてに星形の斑点をつけた，トカゲのように創られている。この動物は大量な雨量の時期をのぞいて決して姿を現さない。そのため天候がよい場合には姿を消してしまう。この動物はたいへんな冷血動物で，あたかも氷のように，火に触れるだけで消し去ってしまう」[8)]。〔…〕この詩人はまたプリニウス，アリストテレス，アエリアヌス，カルダーノの「物の機微について」を利用している。[Indice, 367]

次はテヴナンの註――

神は満足せず→] 結局のところ，創造主はことのついでに，雌雄がつがうことなく産まれる動物に触れている。これについて創造主は 4 種の記憶すべき事例を引き合いに出している。
ウェヌスの助けも借りず→] つがうことなく。交ワラズ。
冷たい気質→] 最初の事例。
サラマンダー→] サラマンダーは身体すべてに星形の斑点をつけた，トカゲのように創られている。この動物は大量な雨量の時期をのぞいて決して姿を現さない。そのため天候がよい場合には姿を消してしまう。この動物はたいへんな冷血動物で，あたかも氷のように，火に触れるだけで消し去ってしまう。プリニウス「博物誌」第 10 巻 67 章。アリストテレス「動物誌」，カルダーノ「物の機微について」第 9 巻〔…〕。
冷たい気質→] 水。[Bartas, III 645]

デュ・バルタスのサラマンダー（プリニウス『博物誌』邦訳では「オオサンショウウオ」）描写に抗し，ガモンは次のような詩句を残している――

なぜなら万物の創造主がそれぞれの種族に産み出す能力を
お授けになったことに満足なさらず，いかなるウェウスも必要とせず
多くの生ける個体に己を繁殖することを赦されたかどうか，
その誤謬はまたしても冷血なサラマンダーが教えてくれる，
この動物は冬に巨大化し，燃え盛る赤い炎に

ただ触れるだけで小さくなってしまうのだ。[Gamon, 392]

最後に《**ペリカン伝説**》について。『聖週間』にはつぎの一節がある——

コウノトリは懐かしいテッサリアに流し目を送り，
ペリカンと一緒になって，陽気に結びつく。
賞讃にあたいする鳥たちであり，これらは，おお，神よ，あなたは
一方を忠実な父とし，他方を忠実な息子とし，
時をへてコウノトリは，餌を与え
生命を与えたものに報いる。
〔…〕
あなたは，もう一方でペリカンが子孫のために
己の横腹を傷つけ自らの血を惜しみなく与え，
子供に活力をさずけるようにされる。それからその子供が
さらにその子供に生命のつながりをなすことを願うようにさせられる。
ペリカンは蛇によって殺されているのをみるやいなや，
自分の胸を切り裂き，子供たちのうえに注ぐ。
生命の気質とともに，それによって子供たちが暖まり，
その死から新たな生命を引き出すのである。
あなたのキリストの喩であって，キリストは虜となって
木に縛りつけられた無実の奴隷を解放するために
その傷口から血を流されて，蛇の致死的な傷口を癒される，
喜んで不死の御身を死すべきものとされ，
アダムが死すべきものから不死のものへとされるがように。[Bartas, IV 201-202]

この箇所にかかわるグーラールの注記は以下のとおり——

ペリカン→〔…〕アリストテレスは『動物誌』第 8 巻 12 章で俗見にもとづいて，ペリカンは子供が蛇に殺されると，雄親は涙を流し，その胸を尖った嘴で破り，血を流すと，その血は子供たちに生命をもどし回復させる，と付け加える。〔…〕アイリアノスは〔『動物誌』〕第 III 巻 24 章〔事実は 20 章〕でペリカンのこの慈愛に言及しているが，また別の角度からである。すなわちペリカンは自分の胃から肉を取り出し，子供たちに与えると言っている。[Indice, 314]

続いてテヴナン——

これらの驚嘆すべき鳥たちに，著者は心の広さ，人への思いやり，憐れみと慈愛を結び付け，子供たちに父母に負っている義務と慈悲の警告とし，またすべてのキリスト

教徒に，子供たちのために自死する本当のペリカンたるイエス・キリストの我々に対するきわまりない愛情を思い起こさせながら，素晴らしい教訓としている。[Bartas, III 501]

これらの詩句と註釈をへて，ガモンは——

ペリカンが腹の下に子供たちを養い生命を与えており
その血とその血の流れるのを見て
ペリカンが無残にも死に瀕したを刺していると
そのように装った理由であるが，
お前はそれを信じ込んでいる，バルタスよ，わがバルタスよ，
そしてお前はこの嘴に騙されて，我々の甥を騙すのだ。[Gamon, V 165]

3

ガモンの批判はもちろんデュ・バルタスそのひとが『聖週間』で無謀にも，しかし当時の常識的伝承に沿って美しく歌い上げた神話や，その神話のもっともらしい根拠を標的にしているのは間違いない。不死鳥やペリカン，サラマンダーの他にも，人口に膾炙した動物・珍獣に捧げられた詩行は枚挙に遑がないが，ガモンはそれに対して執拗なまでの批判を展開する。その描写は批判的視点に基づく百科事典の記述にも擬えうる。不死鳥の荒唐無稽さについては合理性や史実的論拠から反駁され，生殖や生命の長さ，その死が引用箇所に数倍する詩句をもちいて疑問に付される。俎上にのぼる動物描写は批判をともなった百科事典の類に近い。ガモンは，こうした世の「不可思議」にまつわる，しかし口の端に昇りやすい「神話」や「伝承」を疑いもせず宮廷内で朗々と歌い上げるデュ・バルタスにはげしく噛みついた。これがキリスト教の信仰篤きフランス国王のもとで生きていかなければならない改革派信徒が両手をあげて歓迎する類の詩句であろうか。しかもガモンの筆は単に一介の宮廷詩人（仮にそれが改革派の宮廷であるとしても）に向けられているのではなさそうである。先にエチエンヌ＝リエボーの『鄙の家』とオリヴィエ・ド・セールの『農耕劇場』を比較した経験にもとづけば，ガモンの書は単にデュ・バルタスを意識してのものというより，デュ・バルタスに代表されるアンリ４世，もしくは戴冠以前のアンリ・ド・ナヴァールの知的・倫理的環境と，その残り香が漂う同時代へ

の批判であったように思われる。換言すれば，この世紀の末，竜騎兵に追われ国外に新たな旅立ちをする改革派の預言ともとれよう。それはガモンが『天地創造』を叙述した理由として，ヴァンタドゥール公に捧げた諸言で以下のように述べていることからも窺える――「大部分がアモルの虚しいシャンソンで眠りこけているが，低俗で儚い甘いミルトの帽子を棕櫚と月桂樹の誇り高い冠に交換させるため」[Gamon * 3] というのである。時代はいったん改革派と教皇派の棲み分けを許しように見えたが，アンリ 4 世の暗殺直後には改革派の危機，第 2 の聖バルテルミーの虐殺の報がパリ市内を駆け巡った。ガモンがデュ・バルタスに叛旗を翻したのはまさにこの時期である。改革派信徒はそれまでと異なる形で不意の事態に備える心構えをしなければならなかった。筆者はかつてオリヴエ・ド・セールの「科学的」・非土着的改革派信条に着目したことがあるが[9]，その『農耕劇場』が刊行されたのはナントの勅令直後ではなかったか。

デュ・バルタスの詩句には言うまでもなく強いオリジナリティがあって，社会的・文壇的にロンサールの詩風に影をもたらすほどのものであった。それは同じくロンサールを詩壇から追い落としかねなかったフィリップ・デポルトの詩句と対比できるほどのものであった。デポルトの詩句はロンサール流の過度な装飾や主観性，特殊な語法や異教神話から得られた「霊感」に異を唱え，詩想と言語の明哲性，文体の流麗暢達，詩句の諧調，文体の軽快さによって，ルネサンス詩を近代詩につなげる働きをした。それに比するがごとくデュ・バルタスの詩風は，キリスト教伝承と古典古代の神話と土着的伝説を改革派主流のキリスト教解釈に接続させることにより，国内・海外を問わず，あるいは改革派・カトリック教徒の多くの詩人，もしくは詩人もどきに圧倒的な影響を与えた。上述した改革派の大著作家シモン・グーラールは『聖週間』のみならず未完の『第 2 の 7 日間』に詳述極まりない註釈をほどこしたうえで刊行し，大成功をおさめたし，カトリック教徒のパンタレオン・テヴナンも『聖週間』の本文に，彼なりの膨大な註釈をほどこした 4 折判の絢爛たる書物を『聖週間』刊行直後に上梓した。

正統キリスト者たるガモンにとって異教的な発想は排斥すべきであった。そしてまた厳格な改革派信徒として，世にはびこる世俗的通念も断罪しなければならなかった。それはローマ教会が是認したからだけではなく，まさしくそれが土着的であり，改革派教会がその土着性を振り払って新しい世界へと飛翔し

なければならないからである。異教的発想と土着的思想体系にまだまみれているデュ・バルタスもまた断罪の対象となった。世はマレルブの時代を迎えようとしていた。しかしガモンの詩句がバロックからマレルブへの懸け橋としての側面からのみ捉えられるべきか否かついては疑問の残るところである。

註

＊）本稿の底本としたデュ・バルタスの版本とその略号を以下に掲げる（引用にあたっては，版本の略号に続き，巻数・頁数をローマ数字・アラビア数字で示す）――

1．Guillaume Du Bartas, *La Sepmaine ou Creation du Monde*, t. I. Édition dirigée par Jean Céard, Paris : Classiques Garnier, 2011（*abrév.*: Bartas I）.

2．*Premiere Sepmaine ou Creation du Monde de Guillaume de Saluste, Seigneur du Bartas*. En cette derniere Edition ont esté adjoustez la premiere et seconde partie de la suite revue et embellie en divers passages par l'Auteur mesme. Plus ont esté mis l'argument general, amples sommaires au commencement de chaque livre, annotations en marge, et explication des principals difficultez du texte, par S. G. S., Rouen, 1616（*abrév.*: Bartas II）, mihi.

3．*La Sepmaine, ou creation du Monde de G. de Salustes du Bartas, Divisee en considerations de Pantaleon Thevenin Lorrain*, 1585（*abrév.*: Bartas III）.

4．U. T. Holmes, Jr.（dir.）et alii, *The Works of Guillaume De Salluste Sieur Du Bartas*, 3 vol. in 2, Chapel Hill : The University of North Carolina Press, 1935 ; Paris : Slatkine Reprints, 1977.（『聖週間』は第 2 巻 193 頁以降）。

5．Guillume de Saluste Sieur Du Bartas, *La Sepmaine ou Creation du Monde*. Kritischer Text der Genfer Ausgabe von 1581, herausgegeben von Kurt Reichenberger, 2 vol., Tübingen : Niemeyer, 1963.

6．Guillaume de Saluste Du Bartas, *La Sepmaine (Texte de 1581)*. Édition établie, présentée et annotée par Yvonne Bellenger, 2 vol., Paris : Nizet, 1981.

7．Guillaume de Saluste Du Bartas, *La Seconde Semaine (1584)*. Édition établie, présentée et annotée par Yvonne Bellenger et alii, 2 vol., Paris : Klincksieck, 1991.

8．Guillaume de Saluste Du Bartas, *Les Suittes de la Seconde Semaine*. Édition établie, présentée et annotée par Yvonne Bellenger, Paris : Société des Textes français modernes, 1994.

9．Guillaume de Salluste Du Bartas, *La Sepmaine ou Creation du Monde*.

Texte préparé par Victor BOL, Arles : Actes du Sud, 1988.

10. *The Divine Weeks and Works of Guillaume de Saluste, Sieur du Bartas*, translated by Josuah SYLVESTER. Edited with introduction and commentary by Susan SNYDER, 2 vol., Oxford : Clarendon Press, 1979.

その他，フランス国立図書館蔵の『聖週間』初版（1578 年）も部分的に参照した。『聖週間』には出版後，時を経ずしてカトリック教徒のテヴナンと改革派信徒のグーラールによる註釈本が刊行されている。厳密に言えばテヴナンのものは『聖週間』の本文と註釈を含む 1 巻本であるが，グーラールのものは，初めは註釈だけを 1 冊にまとめた書籍だという（これはのちに本文と一括して上梓されるようになった）。なおグーラールは，デュ・バルタスの遺稿となった『第 2 の 7 日間』に註解をつけてまで刊行したが，そうした解釈史や書誌史は本稿の目的ではないので，これ以上は言及しない。Voir *La Seconde Semaine de Guillaume de Saluste, Seigneur du Bartas*, Reveue, augmentee, et embellie en divers passages, par l'Auteur mesme. En laquelle ont esté adjoutez argument general, amples sommaires au commencement de chascun livre des principals difficultez du texte, Par S. G. S., Jaques Chouët, 1593, mihi.

1）Simon GOULART, *Indice de la Sepmaine de Du Bartas*, éd. dirigée par Yvonne BELLENGER, Paris : Classiques Garnier, 2011（*abrév.* : Indice）.

2）精確に訳せば『聖週間もしくは天地創造 / クリストフル・ド・ガモン殿による / デュ・バルタス殿の作品に抗して』（*La Semaine ou Creation de Monde* du Sieur Christofle de Gamon, Contre celle du Sieur du Bartas, Lyon, 1609（*abrév.* : Gamon）, mihi）。

3）以下の伝記的記述にかんし参照したのは，Louis Gabriel MICHAUD, *Biographie universelle*, 100 vol., 1811～ ; HOEFFER, *Nouvelle Biographie générale*, 46 vol., 1852～ ; Louis MORÉRI, *Le Grand Dictionnaire Historique. Nouvelle édition*, 10 vol., 1725～ ; Michel PRÉVOST, Jean-Charles ROMAN D'AMAT et Henri THIBAUT DE MOREMBERT, *Dictionnaire de Biographie Française*, t. XV［1982］の各該当項目だが，特に参考になったのは，郷土史家マゾンによる次の報告書であある――Albin MAZON, *Notice sur la vie et les œuvres d'Achille Gamon et de Christophle de Gamon d'Annonay en Vivarais*, Paris : Lemerre, 1885.

4）参照したのは次の文献の該当項目――Eugène et Emile HAAG, *La France Protestante*. Deuxième édition sous la direction de Henri BORDIER, t. VI, Genève : Slatkine Reprints, 2004.

5）Voir Claude-Gilbert DUBOIS, « Une réécriture de la Sepmaine de Du Bartas au temps d'Henri IV. La Semaine ou creation du monde de Christophe de Gamon (1609) », in *Les Cahiers du Centre Jacques de Laprade, I. Du Bartas*, pp. 45-66.

6）*Ibid.*, pp. 56-61.

7）アウグストゥス帝時代の著述家。エジプトに旅行した経験から，不死鳥がかつてエ

ジプトに到来し，7006 年後に死んだ，と吹聴してストラボンらの失笑をかった。

8）中野定雄訳のプリニウス『博物誌』でも，羅仏対訳本として定評のある所謂ニザール版の羅仏対訳『プリニウス』でも「サラマンダー」の記述は当該箇所ではなく第 10 巻 188 章に登場する。いっぽう 17 世紀初頭に仏訳された版（*L'Histoire du Monde de C, Pline second* [...]. Le tout mis en François par Antoine Du Pinet, Paris, 1608, mihi）では，グーラールが言及するとおりの箇所に件の文章が見いだされる。

9）拙著『〈フランス〉の誕生――16 世紀における心性のありかた』，水声社，2012 年，420–447 頁を参照。